



会 長 挨 拶

理学同窓会 会長 城 尾 昌 範
(昭和39年卒)

会員の皆様お変わりなく益々ご清栄にてご活躍のこととお慶び申し上げます。久しぶりに開催された前回の総会において会長に選出され、大役を引き受けさせて頂き2年が経過しました。昨年9月の理学同窓会総会において引き続き会長を務めさせて頂くことになりました。皆様のご協力により微力ですが同窓会および母校の発展に貢献できればと思っております。

2年間の活動を振り返って見ますと、まず、従来の同窓会会則に関して、2つの大きな見直しを総会に提案し了承を得ました。すなわち、会長の任期を2年とし(ただし、再任は妨げない)、次期会長の承認および会計報告をするため総会を隔年開催すること、今ひとつは総会の報告も兼ねて会報を2年に一度、定期的に発行することを決定し同窓会活動の活性化のスタートとしました。その後の2年間の活動は“事務局だより”に後述されております。さらに、総会のお知らせおよび会報の発送を通して同窓会員の名簿の整備を行いました。その他、会長として年2回の同窓会会長会への参加により大学および各学

部同窓会間との相互連絡や意見交換をしました。

この間、役員並びに会員の皆様のご協力を得ながら同窓会の発展と会員の皆様の交流促進に努めて来しました。特に東京支部の会員の皆様また関西在住の会員の皆様には愛媛大学校友会との連携を通して在学生の就職支援活動のご協力をいただき感謝しております。

政治、経済、異常気象と混沌とした情勢の今日、情報交換や親睦を兼ねて各地で催されている同期会やクラス会は益々重要になって来たと思われます。理学同窓会としても各地で活躍されている会員のご支援により母校の発展に側面からの支援が出来ればと思いをめぐらせております。なお、同期会などの開催の広報などは同窓会事務局のホームページ“会合だより”を通して可能ですのでご利用下さい(連絡は事務局へ)。

最後になりましたが、会員の皆様の今後一層のご健勝とご活躍を心からお祈り申し上げますと同時に、理学同窓会のさらなる発展に向けてご支援ならびにご協力をお願い申し上げ、ご挨拶と致します。

《目 次》

会長挨拶.....	1
学長のひとこと.....	2
学部長のご挨拶.....	3
母校の窓.....	4
教室だより.....	7
会合だより.....	9
会員の広場.....	10
総会の報告.....	14
会計報告.....	15
事務局だより.....	16



愛媛大学のビジュアル・アイデンティティについて

愛媛大学長 柳 澤 康 信

昨年9月4日、理学同窓会総会において「愛媛大学の近況あれこれ」と題して、教育、研究、社会連携などの取り組みに関して1時間あまり話をする機会がありました。そのあとの懇親会で、「このごろ愛媛大学はよく頑張っているね」とか「新聞やテレビで愛媛大学の活躍を知る機会が多くてうれしい」などお褒めの声を頂戴しました。このような声はわれわれ現役の教職員にとってうれしい限りであり、力強い励ましになります。

さて、この小稿の表題をビジュアル・アイデンティティ（visual identity）としましたが、皆さんはこの言葉をご存知でしょうか。この言葉は「企業や商品のイメージを統一して、書体やマークなど視覚的なものによって、そのイメージを表現すること」という意味で、具体的にはブランドマーク、ロゴタイプ、マスコットキャラクターなどを指します。企業がこれらを重視するのは当然のことですが、近頃ではイメージアップを図るために国公私を問わず多くの大学が制定するようになっていきます。

愛媛大学でも遅滞きながら、平成21年の開学60周年を記念して制定することになりました。ネットを通じて公募したところ708作品もの応募があり、その中から私が委員長を務める選考委員会を選んだのが文中の図です。

ブランドマークは円と「e」を組み合わせたシンプルな形ですが、「愛媛の知の拠点（ドット・エヒメ）」となる決意を込めています。円は太陽、「e」は躍動する姿、そして全体の形はすこやかに伸びていく新芽の象徴です。また、色彩は愛媛みかんをイメージした黄色で、明朗さ・快活さを表しています。

マスコットキャラクターは、「e」と愛媛みかんを組み合わせたものです。これもシンプルな形ですが、おっとりとした愛媛の気風を映した穏やかな表情が持ち味で、「遠くをみつめる澄んだまなざしと穏やかな表情は、純粋で素朴な若者の豊かな将来性を示している」という意味づけをしています。愛称は「えみか」。これも愛媛とみかんの組み合わせで、ほほえみを浮か



ブランドマーク



マスコットキャラクター
えみか

べたキャラクターに似つかわしい名前になっています。

ブランドマークの制作者は兵庫県に在住のグラフィックデザイナー福原基和さん、マスコットキャラクターのほうは長野県の主婦、宮川さやかさん。福原さんには平成21年11月11日に行った開学60周年記念式典に出席していただいて、そこで表彰状と副賞を差し上げました。驚いたのは、本学の沿岸環境科学研究センターと地球深部ダイナミクス研究センターの馴染みのブランドマークが彼の作品だったこと。これは沿岸環境科学研究センター長の武岡さんがたまたま福原さんの知り合いであったことによる由。これらの縁で福原さんにはその後、新調した身分証明書、封筒、名刺、それからポロシャツなどの大学グッズのデザインまでお願いしています。

マスコットキャラクター「えみか」はこの1年間で学生・教職員の間でかなり認知されるようになり、人気も上がっているようです。昨年4月、城北キャンパス正門の北側に南加記念ホール、校友会館、愛大ショップの3つの建物を整備しましたが、そのうち愛大ショップの名称は「えみか」としました。このショップでは、附属農場産の安心米や特別支援学校の生徒が制作した木工品、地元の酒造会社の協力を得て作った特別純米酒「媛の酒」、ブランドマークを模したロールケーキなどのオリジナル商品を販売しています。そのショップの前に「えみか人形」を設置しました。この人形は1時間に1回、体を左右に回転しながら学歌を演奏し、夜間には内側から光るようになっています。本学は「地域に開かれた大学」を目指していますが、「えみか人形」もそのための雰囲気づくりに一役買っています。

各大学はブランドイメージを向上させるために、あれやこれやの手を打っています。しかし、「大学ブランド」はなかなかの曲者です。日本では、ブランドイメージは創立の古さや伝統によって固定化しており、容易に変化しません。

もちろん、ブランドイメージを向上させるためには、教育・研究など大学の本来的な使命を充実させることが一番です。しかし、これまで国立大学が実力の割に十分な評価を得てこなかったのも事実です。その理由として、宣伝不足が挙げられます。ビジュアル・アイデンティティの制定などイメージアップのための総合的な広報戦略が今日求められていると感じています。



理学部の近況とご挨拶

理学部長 佐藤 成一

愛媛大学理学同窓会の皆様にはますますご清祥のことと拝察し、お慶び申し上げます。また、日頃より理学部の発展のためにご厚情とご支援を賜り、厚く御礼申し上げます。平成19年発行の同窓会報第5号で理学部の10余年のあゆみについて紹介されていますので、今回はその後の理学部のあゆみを報告し、挨拶に代えさせていただきます。

(1) 第1期中期目標の評価と第2期中期目標期間のスタート

愛媛大学は、平成19年の秋から第1期中期目標に係る自己評価書の作成準備を進め、平成20年に暫定的に「中期目標の達成状況報告書」としてまとめました。最終的な報告書は、第1期の残り約1年分の成果を補足して、平成21年に国に報告しました。各大学からの報告は「大学評価・学位授与機構」により評価を受け、平成22年にその結果が公表されるとともに運営費交付金に反映されました。愛媛大学の評価順位はほぼ中間でしたが、理学部をもつ同規模の14大学の中では、鹿児島大学に次ぐ2位でした。しかし、この評価システムにより大学の活動が正しく評価されているかについては多くの問題点が指摘されており、信頼されるものになるにはまだまだ時間がかかりそうです。

平成22年度から、第2期中期目標期間が始まりました。愛媛大学は、①学生の人的成長に重点を置いた教育の推進、②地域の発展に貢献できる国際性を備えた人材の育成、③特色ある先端的研究拠点の形成・強化を重要課題として掲げ、研究、社会貢献など8つの領域に94項目の基本目標を定め、新たな6年に向かって歩み始めたところです。

(2) 宇宙進化研究センターの設置

第1期中期目標期間の間、物理学科では宇宙物理学を柱の一つにしようとスタッフを整備してきました。その結果、X線観測と可視光・赤外線観測により研究を進める2つのグループを組織することができました。そして、平成19年11月には「暗黒物質」の3次元マップの作成をはじめとする優れた研究業績が認められて、理学部の宇宙物理学を核にして「宇宙進化研究センター」が新設されました。専任教員4名と兼任教員3名の計7人体制でスタートし、今日に至っています。これと並行して、教育面でも「物理学コース」とは別に新たに「宇宙物理学コース」を設け、独自のカリキュラムのもとに、宇宙物理学をより専門的・系統的に学べるようにしました。

(3) 進む施設・環境整備

平成21、22年は、大学の施設の新設・改築が相次いで行われました。城北キャンパスでは、共通教育棟の全面改修にともなう「愛大ミュージズ」(博物館)及びラウンジ(リフレッシュやミーティング用)・双方向的授業ができる教室の整備、記念講堂の全面改修による250余席を擁する「南加記念ホール」の設置、同窓生等も利用できる「校友会館」の新築、城北キャンパス北門近くの部室建物改修による愛大ブランド品などを揃えた「愛大ショップえみか」の設置などが相次ぎ、学生の生活・教育環境が格段に整備されました。平成19年以前の卒業生の皆さんはその変貌ぶりにきっと驚かれることと思います。この間に理学部も大きく変貌しました。その概要は以下の通りです。

【理学部本館の全面改修と施設設備の整備】

平成18、19年各階にリフレッシュコーナー及び2階に生協売店コーナー(文房具、スナック菓子、弁当、飲み物など)設置、情報機器室(約50台のパソコン設備)・各学科に2スパンの自習室(パソコン設備)の設置、エアコンの設置(夏の実験・実習が快適)、すべての講義室にプロジェクターとスクリーンを設置

【キャンパス整備】

平成22、23年インターロッキングブロック及びカラーアスファルト舗装、藤棚・ベンチ設置、自転車置き場整備、理学部北側ブロック塀を低い石垣と植栽に改修。なお、カナリーヤシ(フェニックス)は元の位置にそのまま残しました。

(4) 独立研究科の新設

現在、博士後期課程に「先端科学研究科」を理工学研究科から独立させて新設し、4研究センター(沿岸環境科学、地球深部ダイナミクス、無細胞生命科学工学及び宇宙進化の各研究センター)が主体となって世界的レベルの研究者育成を目指すことになり、その準備が進められています。平成24年度から、学生募集を開始する予定です。これにあわせて、理工学研究科の後期課程の改組計画(専攻と定員の見直し)も進行中です。

(5) これからの理学部の役割

科学の発展が経済を支える—いわゆる「知識基盤社会」の到来を迎え、理学部が果たすべき役割はますます大きくなってきました。もちろん、理学部の

目的は、その学問的特質から世界を視野に入れて教育研究の成果を上げることが中心であることは言うまでもありません。一方、教育のグローバル化により、国際基準に見合った高度な専門的知識と課題解決能力を有する人材を育てることが大学に求められています。社会や企業からは、「社会で上手くやっていくための、あるいは成功するための能力」すなわちコンピテンシーの育成を大学教育に期待しています。そして、地域の経済・文化の発展に寄与するために地域と協働することが今や当たり前のこととして受け入れられています。このように大学に求められる要望は多面的であり、期待も大きくなっています。この要望や期待に大学が応えていくことは時代の要請であり、避けられないことであると考えています。

平成16年の法人化以降、理学部教員の教育研究以外の負担は相当大きくなりましたが、最近5年の記

録をみますと、論文数は減少することではなく、教員が獲得する競争的資金は増えています。この原因の一つに理学部教員ひとりひとりの努力があることは間違いありません。もう一つ大きな要因は、課せられた諸課題に教職員が役割分担をするなど組織的に対応していることがあげられるでしょう。大学あるいは理学部をめぐる環境は、今後さらに厳しくなることはあっても、軽減されることはないと思いますが、制度、組織、施設、環境などさらに改善を重ねて、理学部の本分である教育研究を中心に諸課題に対して良い成果を上げるべく努力を重ねてまいります。これからの大学運営や改革には、社会、企業そして卒業生皆様の意見を尊重して取り組んでいくことが大事であると考えていますので、同窓生の皆様には、様々な機会を通じてぜひ忌憚のないご意見を理学部にお寄せ下さるようお願い申し上げます。最後に皆様の益々のご健勝とご多幸をお祈りいたします。

母 校 の 窓

母校、愛媛大学理学部では平成21年度末に化学教室の真鍋敬教授が退任されました。また平成22年度末に数学教室の森本宏明教授、本会の顧問としてお

世話になった大六隆事務課長が定年を迎えられます。皆様からメッセージをいただきました。



恩 師

真 鍋 敬

退職してから、これまでのことを振り返る機会が多くなりましたが、やはり一番思い出すのは大きな影響を受けた先生方のことです。今治市の日吉小学校5年生のとき、素晴らしい担任の先生（故矢野高宣先生）に出会うことができ、学校での毎日が楽しくなりました。社会科や算数の授業などいくつかの場面が、黒板の前に立つ若々しい（当時30歳くらいでしょうか）先生のお顔とともに思い出されます。父が松山で教員をしていた関係で、6年生の2学期から愛媛大学近くの清水小学校に転校しました。

高校を卒業して大学生になってみると、ほとんどの先生、特に教授は近付き難い存在で、授業も一方的で学生は人間扱いされていないような感じでした。今から思うと、あのころ起きた大学紛争は政治的な問題だけでなく、このような状態に対する学生の不満が背景にあったように思います。大学院生会の委員として教授会とやり合ったり、「大学解体」

を叫ぶ学生グループへの反対デモに参加したりして、博士課程1年から2年にかけては実験どころではなく、先の見えない毎日でした。それを見かねた当時京都大学理学部化学科助教授の故廣海啓太郎先生に、酵素反応速度にかかわる研究テーマをいただき、懇切なご指導のもとで何とか4年で博士論文を書き上げることができました。

大学院生時代の不行跡から、大学の職につくのは難しいと覚悟していたのですが、幸運にも30歳で東京都立大学（当時）理学部化学科の奥山典生教授の研究室に助手として採用されました。奥山先生との連日の討論から、研究テーマは独創的であるか、実験計画に妥協はないか、など研究に対する厳しい姿勢を学び、7－8年後にはもうお互いに話をしなくても考えていることがわかるようになりました。都立大学に15年余り勤めたあと、新設された姫路工業大学理学部（当時）の寺部茂教授の研究室に助教授

として採用され4年過ごしました。ある日、私が大学院生のころに研究室の助手をしておられた六鹿宗治先生からお電話を頂き、「愛媛大学の理学部化学科で公募をしているぞ、そろそろ親孝行をしたらどうや」とのこと、締め切りまで一週間ほどしかなく大急ぎで資料を整えて応募したところ、また幸運にも採用されました。一人っ子の私が松山に戻ったことをことのほか喜んでくれた父は、着任後1年と4ヶ月足らずで亡くなりました。

この公募当時学科長であられた河野博之教授には、私が研究を始めやすいように理学部本館2階の数部屋を空けて用意して頂いただけでなく、それらの部屋の壁のペンキ塗りまでして頂きました。ペン

キの塗り痕は芸予地震後の耐震改修工事でなくなりましたが、河野先生とは理学部と中国清華大学理学院との交流協定の締結のための北京訪問などでおつきあいを頂き、その篤実なお人柄と科学に対する献身には、お会いするたびに感服します。

東京で大学の教員になった時は、まさか毎日の通勤の行き帰りに母の住む実家や卒業した小学校の前を通ることができるようになるとは思っていませんでした。このような幸運を得たのも、また教えることや研究することの楽しさを35年にわたって感じ続けることができたのも、お名前をあげさせて頂いた先生方をはじめ多くの恩師のおかげです。この場を借りて深く御礼申し上げます。

長いこと夢をみていた

森 本 宏 明

仙台から本学に赴任して、27年の歳月が夢のように過ぎました。定年にあたり、自らの辿って来た道を振り返ってみることにします。

2000年に待ち望んでいた短期留学が年齢制限の最終年になって認められました。まず、若い頃75年にアメリカでお世話になった加藤先生にお目にかかって挨拶をしなくてはと UC Berkeley から出発を開始するつもりでした。当時、ペーパーの実績も何もない突然現れた青二才を快く受け入れてくれ親切にしてくれました。休日には車で1時間ほどの Napa Valley へ連れて行ってくれて Winery で Wine を御馳走になり、ぶどう畑に座って奥さんと3人でおにぎりを頂きました。大勢の弟子に囲まれて数学の議論をしている様子を見るにつけ、世界の一流人は流石に凡人とは違うと感動を受けました。今年ブームの龍馬さんが勝先生の弟子になったときに、きっと同じ思いだったに違いありません。しかし、残念な事情があってお目にかかることが叶わなくなり、生涯の心残りとなっています。

計画は New York と Paris の大学に1ヶ月ずつ滞在することにしました。セミナーや研究会に参加する他は観光めぐりです。地下鉄で列車を間違えて途方にくれたり、ひったくりに会いそうになったり、山の中で大嵐にあったり、片言のフランス語が通じたりと、様々な冒険のおまけ付きです。遊んではばかりいたようにも見えますが、そうではありません。外国の空気を吸うことは研究の肥やしとなり、新鮮な気分と漲る活力を生み出してくれます。

帰国後、一念発起して世界中で使われる本を書くことにしました。自分の老化に抵抗しながら、薪に臥す様にして完成までに4年を費やしました。次に出版社の用意した referee 達から承諾を得る手筈になります。Referee reports を待ったり、原稿を読

んでないのが分かって反論したりして、胆を嘗める思いで3年。最終的に Cambridge 大学出版から好意的な受理の通知を受け、それから出版までに1年掛かりました。Internet で調べると、出版社の恥にならないぐらいは普及していて、一安心です。仙台的知人からは、「よくやった。そんな発想は南の人だからできるのよ、北の方の人には思い浮かばないね」と賛辞を頂戴しました。あっそうだったのか、道は違っても龍馬さんと同じ夢を見ていたのだと、思い至りました。子供の頃、遠足で桂浜へ行ったときには、「この銅像の人は、どうした人なが」、「“りゅうま”と書いちゃうにどうして“りょうま”と呼ぶが、間違っちゃうあせんかえ」、とずっと思っていました。あなたの倍近く生きてきて、挫折の辛さや成功の喜びを知りました。あなたの夢が志半ばで断たれた無念さに涙し、同じ土佐の血が流れていたことを誇らしく思います。今度京都へ行ったら、お墓参り致します。

研究は確率微分方程式（精密になった Langevin 方程式で SDE と略記）で記述される経済モデルのシステムを最適化することに焦点があります。企業



の資本が Black-Scholes SDE で表され時間の増加関数として投資量を決定する場合、得られる利潤から投資量を差し引いた純利益の total 期待額を最大にするにはどうすれば良いでしょうか。資本金が或るしきい値 A 以下の企業にはリスク回避のため投資をしません。資本が A を超えているときには、資本が A に達したときだけ適切な量を投入するの

が最適政策で目的を達する事ができます。勿論、 A の存在や投入量について解析はできますが、実用化のためには数値計算が必要です。

この研究は緒に就いたばかりで、これで隠居という訳にはいきません。テーマを発展させ、纏まった本として出版できたら無上の喜びとなるでしょう。

脳天気な極楽オヤジ

大 六 隆

先日、理学同窓会から会報第7号の発行に際して「寄稿依頼」という身に余る有り難いお話をいただいた。幼少の頃よりずっと学業については全く熱心でない上に読書することも希なことも手伝って、文章作りが苦手なため、一度は辞退させていただき旨のお返事をしたものの、このような機会は一生に二度とないことに鑑み、恥を忍んで同窓会のご厚意に甘えさせて頂くこととした。

“脳天気な極楽オヤジ”これが、僕がこの世でも敬愛する妻の「夫評価」である。夫婦なんだから…もう少し気の利いた評価をもらえないものかとも考えるが、そんなことを言おうものなら、「アンタはいいよネェ〜！お気楽で…」とのお小言を頂戴した後に「男はツマラン!!」と、持ち前の九州訛りで一撃必殺の怒りの鉄拳をお見舞いされることとなる。いずれにしても、世界中の誰よりも長い時間を僕と共に過ごしている「相方」の実体験に基づく偽らざる評価なのだから、甘んじて受け入れなければならぬまい。その実僕は、八幡浜市の山奥の小さな山村で農家の長男として産声を上げて以来、良きにつけ悪しきにつけ…何かに悩み苦しんだという記憶がほとんど無い。

学業の修得が優先されてしかるべき時期の、幼少期から小学、中学、高校、更には大学に至るまでも、あまり好きではなく苦手な勉学に真正面から取り組むことから逃げ、気の合う仲間達とスポーツや遊びを通じて楽しく時を過ごしてきた。特に、高校時代には、当時八幡浜高校陸上競技部の顧問をされていた兵頭寛先生（後に本学教育学部教授、名誉教授）に厳しくご指導いただき、しっかりとした基礎体力を養成していただき、3年生時には1600m リレーのメンバーとしてインターハイにも出場することができた。また、大学時代には、入学早々に体育会合気道部に入部し、3年生時から主将となったこともあり、勉学そっちのけの学生生活に更に拍車がかかった。そんな僕の大学生活の状況を称して両親曰く、「お前は、体育学部合気道学科に入学したのか!」と…。でも、その時の仲間達は、僕の一生の“宝物”であり、それよりも何よりも…生涯の伴侶



納得サイズ（50cm）のグレを手にご満悦の“極楽オヤジ”
[「渡船よしだ屋」ホームページ釣果報告(2010. 12. 17)より]

と出会ったのもまた部活動を通じてであった。

幸いなことに、このようなスポーツや遊びに興ずる“お気楽生活”は、大学職員となってからも続けることができおり、我が家に帰り着くなりユニフォームに着替えてグローブを片手に慌ただしくナイターの試合（3チームに所属しているため、シーズン中はほぼ連日）に出かけようとする僕の目をじっと見つめて、可愛い孫娘から「ネェ・ジイジ、ジイジの本当のお仕事はヤキューなの…!？」と、問われる始末。（孫娘の後で、妻と娘がザマ〜ミロ！と言わんばかりにニヤリ…）

1951年2月生まれのため、会報が発行される頃には既に還暦を過ぎているはずの僕は、「この歳」になってもまだ、やがて訪れる「死」に至るまでに成し遂げたり継続していきたい“夢”や“目標”が一杯ある。①60cm オーバーのグレを釣り上げること、②70歳になるまで少なくとも1年に1本はフルマラソンを完走すること、③70歳になるまで東温市代表のソフトボールチームの一員としてプレーし続けること、④四国八十八ヶ所の歩き遍路を成就すること、⑤田舎で一人気丈に暮らし続けている母にそっと寄り添い、優しく見守ること、そして何よりも…永年に亘りこんな“脳天気な極楽オヤジ”を温かく支え続けてくれた妻と共に仲良く平穏で心豊かに悠々と

時を過ごすこと…これらの“夢”や“目標”を実現するため、これからも両親から授けてもらった有り難くも丈夫な我が身のメンテナンスを怠ることなく、一日々々を大切に、“明るく”“楽しく”そして“いさぎよく”生き抜いていきたいと考えている。

末筆ながら、これまで出会いお世話になった皆様方に改めて御礼を申し上げますと共に、皆様方の今後益々のご健勝とご活躍、理学同窓会の更なるご発展を心よりお祈り申し上げます。

合 掌

教室だより

【数学教室】

同窓会の皆様には各分野でご活躍のことと存じます。前回の同窓会報から2年が経っております。数学教室の教員・学生の近況についてご報告いたします。

まず数学教室の人事についてご報告いたします。平成21年3月には木曾和啓先生がご退職され、後任に学術振興会特別研究員の尾國新一先生が助教として平成21年4月に着任されました。同じ平成21年4月に神戸大学工学部から内藤雄基先生が、平成20年3月に広島大学工学部に転出された坂口茂先生の後任教授として着任されました。上記2名の新戦力を迎え、教室構成員一同は活発な教育・研究活動に勤しんでおります。また、平成21年4月より野倉嗣紀先生が副学長として大学運営にご尽力されております。なお、平成23年3月には、森本宏明先生がご退職される予定です。現在の数学教室の詳細については、ホームページ <http://www.math.sci.ehime-u.ac.jp> をご覧ください。

次に、学生の就職状況についてご報告いたします。従前より数学科学生・大学院生には中学・高校教員を目指す者が多数おりますが、昨今も例にもれず、平成21年度卒業・修了者のうち22名が教壇に立っており、平成22年度の卒業・修了予定者においても16名が教員を希望しております。一方、民間企業への就職については、日本を取り巻く昨今の経済不況を反映し、就職活動が難航した学生が多く見られました。この不況がいつまで続くかは予測できませんが、教育体制を損なうことなく就職に成功できる体制作りを強化し、いかなる状況にあっても数学科で学んだ学生を堂々と社会に送り出していきたいと考えております。卒業生の皆様におかれましても、一層のご支援・ご協力を頂戴できれば幸いです。

末筆ながら、皆様のますますのご発展とご健康をお祈り申し上げます。(平野 記)

【物理学教室】

理学部同窓生の皆様におかれましては、ますますご健勝のことと存じます。

先の理学部同窓会報（平成21年2月発行）から、人事面、教育面で新しいことがありました。まず、人事面ですが物理学教室では2名の新しい方を迎えました。一人は、平成21年4月に教授として着任された栗栖牧夫先生です。先生は、物性実験に関する研究、特に熱電半導体やナノマテリアルの研究を行っております。もう一人は、平成22年4月に助教として着任した宮田竜彦先生です。先生は、ミセルやタンパク質などが水溶液中で示す自己組織化現象を計算機を用いて解明することを目指しております。また、前号で紹介しました長尾透先生が京都大学白眉プロジェクトの准教授に採択され（京都大学webにて公開されております）、4月より京都大学に異動することになりました。先生は愛媛大学在任中に宇宙進化研究センターの兼任教員として教育研究に尽力されました。

次に教育面ですが、愛媛大学理学部、理工学研究科（理学系）及び宇宙進化研究センターは、平成22年3月29日、宇宙物理学の教育研究を発展させることを目的に、鹿児島大学理工学研究科及び同大学理学部と部局間学術交流協定を結びました（愛媛大学のwebページにてトピックスとして掲載されております）。現在、学術面、教育面での交流が進められており、平成22年12月には両大学の理工学研究科同士で単位互換に関する協定が結ばれました。今後、教育面での本格的な交流が実施される予定です。

優れた人材を迎え、教育研究をさらに活性化できるよう教室構成員一丸となって努力していきたいと思っております。今後ともご支援をお願いいたします。(栗木 記)

【化学教室】

現在の化学教室には、無機化学、物理化学、分析化学、有機化学、構造化学、複合体化学、生化学の7つの研究グループがあります。無機化学は、高橋亮治教授、山田幾也助教が担当しています。物理化学では、坂口浩司教授が京都大学に転出され、浅田洋教授も平成24年3月で定年となるため、新たな物理化学の担い手を現在選考しているところです。分析化学では、真鍋敬先生が平成22年3月で定年となられ、北大薬より核酸化学をされている紙谷浩之教授が着任されました。有機化学は、INCSより平成21年4月に宇野英満教授が異動し、山田容子准教授

は平成23年1月に奈良先端大へ転出しました。これに伴い平成23年1月に奥島鉄雄先生が准教授に昇進し、助教に中江隆博助教が物理化学より異動しました。INCSは、平成21年4月に倉本誠先生が准教授に昇進し、平成21年10月に森重樹助教が採用され、谷弘幸准教授とともに運営されています。構造化学は、長岡伸一教授、小原敬士准教授、垣内拓大助教で運営しています。複合体化学は、佐藤久子先生が平成21年4月に准教授として着任、平成22年4月に教授に昇任して、キラル錯体の振動円二色性について研究されています。生化学は、林秀則教授と杉浦美羽准教授が植物の耐性や光合成について遺伝子レベルの技術を用いて研究されています。(宇野 記)

【生物学教室】

卒業生の皆様におかれましては、お元気でご活躍のことと存じます。前号の理学同窓会報(第6号)でお知らせしましたように、生態学研究室におられた柳澤康信先生が平成21年4月から愛媛大学学長になられました。また、植物形態学研究室の佐藤成一先生が、同じく平成21年4月から理学部長になられました。愛媛大学ならびに理学部の運営のため、生物学科の先生方がこのように多大な貢献をされていることは大変喜ばしいことであり、さらなるご活躍を期待したいと思います。柳澤先生は生物学科の教育からは完全に手を引かれたので、その後任として平成22年4月から畑啓生先生が助教として着任されました。畑先生のご専門は柳澤先生と同じく海洋生態学です。生物学科内で一番の若手ですので、新戦力としての活躍を期待しております。前号以来、学科内のその他の構成員に変化はありません。

今年の夏、筆者(加納)が教養部に赴任したころ(約25年前)に卒業された方々が松山で同期会を開催されました。私もお誘いを受けたのですが、学会出張と重なり、残念ながら出席できませんでした。しかしながら、大学生生活を過ごした松山を思いだし、再びこの地に集まってくくださる卒業生がおられることを、とてもありがたく思っております。また、ご存じの方もおられると思いますが、愛媛大学では今年から「ホームカミングデイ」なるものを設定いたしました。対象となるのは、まだ最近の卒業生に限られてはおりますが、愛媛大学に集まっていただき親睦を深めると同時に、転職あるいは再就職等に関する支援サービスを行ったり、逆に在校生の就職支援をお願いしたりするためのものです。平成22年度は学生祭と重なるよう、11月12日(金)と13日(土)に開催されました。このように、愛媛大学は卒業生との結びつきを非常に重視するようになってきております。卒業生の皆様におかれましては、是非積極的に大学を訪れ、現在の大学での教育や研究についての

理解を深めると同時に、後輩の学生や我々教員にもいろいろとご助言をいただければ、とてもありがたく存じます。

最後になりましたが、卒業生の皆様のこれからのご活躍とご健康を心から願っております。

(加納 記)

【地球科学教室】

厳しい寒さが続いておりますが、卒業生の皆様には、ますますご清祥のことと存じます。前回の同窓会報(平成21年2月)以降、2年あまりが経過しましたので、この間の地球科学教室の近況をお知らせします。

教室の人事関係では、平成21年6月1日付けで中国科学院から楠橋直先生が助教として着任されました。楠橋先生は、古生物学、特に中生代哺乳類の数少ない専門家であり、今後、新戦力の一人として地球科学教室での研究の展開が大いに期待される場所です。教室の人事関連は以上ですが、前回の報告でお伝えしたように、地球深部ダイナミクス研究センター(GRC)のグローバルCOEプログラム(GCOE)が採択されたためGRCのメンバー構成に大きな変動がありました。GRCの教員の多くは沿岸環境科学研究センターの一部の教員とともに地球科学教室における教育に参画していただいております。GCOE関連の教員、上級研究員センターの教員など、前回の同窓会報に含まなかった方々も含めて、GRCの人事異動(地球科学教室関連の教員のみ)の情報を以下に記載します。

平成20年10月に土屋旬先生が上級研究員に採用されました。同11月に松影香子先生が茨城大学からCOE准教授として着任されました。同11月に西原遊先生が上級研究員に採用されました。平成21年1月に、それまで地球科学科の教育にご尽力いただいたGRCの山田朗先生が愛媛大学先端研究推進支援機構教育研究高度化支援室ラボマネージャーとして転出されました。一方、平成21年4月に井上徹先生、土屋卓久先生のお二人が同時に教授に昇任されました。同4月に西山宣正先生が准教授に昇任されました。同4月に平井寿子先生が筑波大学から、藤野清志先生が北海道大学から、それぞれCOE教授として着任されました。同4月に丹下慶範先生、桑山靖弘先生、石河孝洋先生が助教として着任されました。また、同4月にはGRCは地球深部物質構造動態解析部門、地球物性計測部門、量子ビーム応用部門、地球深部活動数値解析部門の4部門を軸として再編されました。ついで、平成22年4月にMatthew Whitaker先生が助教として着任されました。同9月には石河孝洋先生が退職されました。

今年度の学部生・院生の就職状況は、悪化しつつ

ある経済状況にもかかわらず、まずまずのようですが、年度の終わりが近づいた時期になってもまだ内定がもらえない学生もあり、きびしい状況に変わりはありません。国の施策によれば、新卒の期間を数年間に延長し企業側に雇用を促進するという動きもあるようですが、目前の就職がなかなか決まらない学生にとっては、まだまだ辛い日々が続きます。学

生の就職につきましては、卒業生の皆様のあたたかいご協力とご支援をいただければ幸いです。

なお、現在の地球科学科の研究・教育などの詳細につきましては地球科学教室のホーム・ページ (<http://www.sci.ehime-u.ac.jp/earth/>) をご覧ください。最後になりましたが、卒業生の皆様方の益々のご発展とご健康を祈念いたします。(山本 記)

会 合 だ よ り

第25回愛媛大学理学同窓会東京支部総会報告

今年度の理学同窓会東京支部総会は平成22年10月30日(土)に東京田町の愛媛大学サテライトオフィス東京が入っているキャンパス・イノベーションセンターにて実施されました。ここで理学同窓会東京支部総会を開催するのは2年目で、今年度もサテライトオフィスの全面協力が得られました。ちょうど愛媛大学サテライトオフィス東京がこれまでの5階から3階に引っ越した直後の総会となり、広くなった新しいオフィス内も見させていただきました。

そして今年度も総会及び懇親会の前に講演会を実施しました。その講演会ですが、松山から愛媛大学沿岸環境科学研究センター 生態系解析部門 准教授の北村真一先生が上京して下さり、「重油汚染が魚類感染症の発生に与える影響」という題でお話をいただきました。関東在住の北村先生の卒業生が集まり、講演会もタイムリーなものとなりました。

その後は総会及び懇親会へと進みました。今年の総会には総勢30名弱の方のご出席があり、松山からは講演をして下さった北村真一先生の他に佐藤成一理学部長(生物)、就職担当の土屋卓也先生(数学)、城尾昌範理学同窓会長がいらっしゃいました。総会では佐野東京支部長、佐藤成一理学部長、城尾昌範理学同窓会長、就職担当の土屋卓也先生からの挨拶をいただきました。また会場には旧制松山高等学校同窓会東京支部・校友会首都圏支部・工業会東京支部・ユウカリ会東京支部・東京章光会・愛媛大

学サテライトオフィス東京の横田勝氏など多くの方々のご臨席を賜り、大変感謝している次第です。懇親会では和気藹々と歓談が進みました。最後には理学同窓会東京支部として恒例になりつつある福引抽選会も実施され大いに盛り上がりました。

今年の東京支部総会は、参加人数が少ないこと以上に開催できるかどうかの危機的状況がありました。それは総会当日に台風14号が関東に最接近して、状況によっては上陸するかもしれないという予報が出ていたことでした。私が東京支部役員を引き継いだ1年目の総会のときも台風が近づいたので、開催日を8月から10月末に移したのですが、またもや台風が接近…夏の猛暑の影響なのか、正に危機的状況でした。最後の最後まで関係者や松山からいらしてくださる先生方と何度も連絡を取り合うなど、落ち着かない心境でした。しかし当日は台風にも負けず30名弱の方々が出席して下さったことに深く感謝申し上げる次第です。念のため帰りの交通機関を考慮して懇親会を予定より早く進めましたが、ふたを開けてみれば結果的に台風は上陸せず、懇親会終了後は傘もささずに帰宅できました。終了後は東京支部役員一同ほっとしたと同時に、苦労が報われた総会となりました。

毎年少ない参加人数のため苦悩していますが、今後は何とか若い卒業生が参加してくれる東京支部総会にしたいと思っています。連絡先も不明の方が増えていきますので、名簿更新の為にもご協力をどうぞよろしくお願いします。また現状では東京支部役員におきましても人数が非常に少なく、結果として校友会業務におきましても他学部同窓会東京支部に頼っているのが現状であります。理学同窓会東京支部役員も募集中です。苦しい状況ながら、この東京支部は理学同窓会の支部としては全国で唯一存在している支部でありますので、何とか存続させながら同時に城尾昌範理学同窓会長から示されましたように、今後全国に理学同窓会の支部が設立されることを願っております。

卒業生の皆様のご協力を、どうぞ何とぞよろしくお願いします。

総務幹事：佐伯 雅弘(理・数学13回卒)



S57生物学科入学のクラス会報告

生物学科に昭和57年入学の同期会を平成22年7月17日(土)に、松山市の居酒屋を借り切って行いました。そのときのことを少し報告させていただきます。

卒業当時、お互いの連絡先のことも考えず、それぞれが「それじゃ!」と卒業していった私たちでした。何人かとは年賀状をやりとりなどしながら、繋がりがありました。卒業から四半世紀の時を経て、2年ほど前から当時のクラス名簿と理学部の同窓会名簿を頼りにクラス名簿をつくりはじめ、やっと今年の開催となったのです。

卒業後はじめてのクラス会を行ったところ17名の参加がありました。残念ながら仕事の都合で全員が集まることはありませんでしたが、当時の教官も6名ご参加いただき、盛況のうちに一次会の3時間が経過しました。25年間というブランクを経て積もる話もあったはずですが、同じ空間を共有したときから私たちは当時のままの感覚で時を過ごしました。とは言っても、お互いにつぶし合うこともなく、実に平和に楽しく飲めた夜となりました。(直前の企画のやりとりの中で、私の「ところで、みんなは何時まで飲むのかな? 宿はいるかな?」という問いに、松山在住の幹事のO君は「覚悟はできとる。なんぼでも来い。」との返事でしたが…。)

ご参加いただいた先生方ありがとうございました。先生方の懐かしい顔を拝見し、とても嬉しかったです。

当時、学生時代の貴重な時を共に過ごした皆さん(先輩や後輩にかかわらず)、またいつか一緒に飲めるといいですね。最後に、今回連絡の取れなかつ

たみなさん、良ければ一報をください。連絡先の集約は同窓会事務局にお願いしています。みんなで集まりましょう。この投稿により、多くの方とつながれることを期待しています。

昭和61年卒業(理学部生物学科) 内田 保博



第5回 生物学教室有志の同窓会

平成22年9月4日、理学同窓会総会・懇親会終了後に、生物学教室有志の同窓会が開催されました。出席者は36名でした。



会員の広場

40年前の愛媛大学

昭和45年卒業(文理学部理学科数学専攻) 森 茂之

森茂之と申します。文理学部理学科[数学]第18回(昭和45年)卒業生です。

本年が「卒業40周年」に当たることから、初めての同窓会を計画しました。

ひたすら前だけを見て進んで来ましたが、後ろを振り返る心境になりましたのは、やはり黄昏世代となった証でしょうか。昨年から準備に入り、平成22年6月19、20日に10名が、大学にて再会することができました。

そこで、「40年前の愛媛大学」の様子を思い返し

てみました。

【市内電車】やはり松山は市内電車です。電車の外観、内装、また運転系統、運転間隔も当時のままのような気がしました。ただ、「愛大前」の電停名は、「日赤前」に変わっていました。

【正門】さあ40年振りの構内です。右手に「図書館」、左手に「法文館」、外観は耐震工事のせいか少し変わっていましたが、他は当時のままです。

両館の間の、よく寝ころんで過ごした広い「芝生」は、植樹されベンチが置かれていました。

【講堂】図書館の東の講堂。綺麗にリフォームされていましたが、当時でも相当古かったのでよく残ったものです。体育実習でテニスやサッカー等の人気種目からあぶれ、「ダンス」を選択せざるを得なかった諸兄も多かったことでしょう。その実習がこの講堂で行われました。ダンスといっても踊るのではなく、ただひたすら先生の太鼓に合わせ、ステップを踏むもので、特に男子は忸怩たる思いでいっぱいでした。

【教養講義棟】図書館の北。耐震工事はあるものの当時のままでした。大講義室もそのままです。

【学生食堂】教養講義棟の東。建物は残っていましたがショップになっていました。別の場所に立派な大学会館が建ち、学食も移ったようです。

【自然科学館】図書館の西。いよいよ理学科の在った建物です。社会科学系に対し、そう呼ばれていました。現在は、リフォームされ「愛媛大学ミュージアム」として使用されておりました。

大学の学術研究の成果を保存、展示する博物館だそうで、併せて大学の歴史も展示されています。エントランスでは、旧制松山高等学校講堂「章光堂」の模型が迎えてくれました。この講堂は私どもの入

学式が行われた「持田講堂」のことです。中の案内は、学生スタッフによるガイドツアーで懇切丁寧にご説明頂きました。さらに、本来は入れない昔の数学教室のあった場所にも、厚かましくお願いして入らせて頂き、大感激でした。

【キャンパス】全体として、施設、芝生、道路と整然と区割りされた様は、40年前に完成されていたのでしょうか、少しも変わっておりません。当時、御幸寮生の間で運転免許の取得が流行し、自動車学校の費用はとても捻出できないので、この構内を教習所の実習コースに見立て、免許を取った人がレンタカーで次の人へ教え、順送りに免許を取ったことも思い出されます。

最も残念だったのは、あの広大なグラウンドが無くなっていたことです。400mトラックを備えた陸連公認施設(記録が出れば公認される。)だったのですが。テニスコート、体育館、プールは昔のままでした。もっと続けたいのですが、懐古は尽きません。

最後になりましたが、同窓会の開催に際し、理学同窓会ご担当の高田先生には大変お世話になりました。改めてお礼申し上げます。

I E C 活動

昭和44年卒業（文理学部理学科化学専攻） 乾 泰 夫

国際標準や国際標準化という言葉を開かれたことがあると思います。ISO9000（品質マネジメントシステム）やISO14000（環境マネジメントシステム）が有名ですが、電気関係にはIECという国際標準があります。「世界一になる理由は何があるんでしょうか？ 2位じゃ駄目なんじゃないですか？」という言葉を出した大臣がいましたが、通常、世界一になると国際標準になり易いというメリットがあります。企業にとって国際標準を制することは国際競争力をつける上で欠くことができない条件となるため、世界の有力企業が力を入れている分野です。

IEC（国際電気標準会議）は1906年に設立され、電気製品などの安全性向上のためのIEC規格を作成しています。私は、1987年から電気製品、部品、材料の火災危険性を評価する試験方法に関する国内技術委員会に属してIEC活動に携わっています。1990年にプラスチック材料の燃焼試験方法を作成する委員会が開かれたので、その時から国際会議に出席するようになり、28回、18か国での会議に出席しました。燃焼試験方法はプラスチックの試験片にバーナの炎を当てて燃え方を評価するものですが、炎の揺らぎなどによって試験結果が大きくばらつくので、試験に携わる人間にとって悩ましいものでし

た。バーナでガスと空気を混合して炎を作りますが、当初は炎の高さだけしか規定されておらず、この炎が瞳の色が黒い我々にはよく見えていないことに気づき、問題点を指摘しました。ちなみに瞳の青い人種がサングラスをかけるのは、目の光線透過率が良過ぎるために外の光が眩しく感じるためです。それで炎の高さに頼らない、ガスと空気の流量を制御するバーナを提案しました。これが国際審議の場でイヌイバーナと呼ばれたので、社内でもそのように喧伝してくれる人がいて、お蔭でローテーションされないで長くこの仕事に携わることになりました。いずれにしても、創意工夫をするというのは楽しいものです。

社外活動が多いので、「会社に居なくてもいいが、会社になくってはならない人になれ」などと嘯きながら仕事をしていましたが、2時間前に出社して、他の人が出て来る頃には外に出て、定刻後に帰社して再び社内の仕事をこなさなければ続けられない仕事です。欧米ですと、国際規格をいくつ作成したというようなことが評価点に加算されるようですが、国内では重要性は理解しても適正に評価するシステムがないところが泣きどころです。

2009年に会社を退職したのを機に、国内のIEC

活動推進会議から議長賞をいただきましたが、2010年には IEC から IEC1906賞という栄誉を与えられました。これは2004年に設けられた賞で、国際規格を作成する上で個人として貢献した者に与えられるものです。この時に日本から20名、同じ技術委員会ではオランダの DSM 社の人間と私の2名が表彰さ

れました。日本人は、英語のジョークなどにはついて行けないので、言葉ではなく出来るだけデータで説得しようと努めていますが、長くやっていると信頼もされるようになって、少しは日本のために貢献できているかなと思って、この仕事を続けています。

米国環境保護庁 2009 Ozone Layer Protection Award 受賞

昭和47年卒業（理学部化学科） 森 英雄

1970年代に chlorofluorocarbon (CFC) 等のハロゲン系ガスが成層圏のオゾン層を破壊することが確認されたことを受け、1987年に国連環境計画のもとでモントリオール議定書が締結されました。モントリオール議定書では一般用途のオゾン層破壊物質が1996年までに段階的に廃止され、転換が困難なものについては、議定書の管理下で段階的に廃止されることが決まりました。Ozone Layer Protection Award は、米国環境保護庁（U.S. Environment Protection Agency）がオゾン層保護に功績があった世界中の個人、団体、企業に贈る賞で、1990年に創設されました。

私は大塚製薬で、創薬部門、製剤部門、薬事部門をそれぞれ10年余経験しましたが、製品の中にはメプチンエアーという喘息治療薬用の吸入エアゾール剤があり、当時はオゾン層破壊物質 CFC を噴射剤として使っていました。そのような関係で、オゾン層保護の問題を扱う日本製薬団体連合会・フロント検討部会の代表を1996年から務め、日本の吸入エアゾール剤の脱 CFC を世界に先駆けて達成しました。特に日本では、CFC MDI の廃止及び CFC を使わない吸入剤への転換について、タイムスケジュールを含む方針を設定し、公表したことと、企業と行政との連携の2点がユニークと評価されました。また、国連環境計画 UNEP の Medical Technical Options Committee (MTOC) のメンバーとして10年余り貢献したことも評価されました。

授賞式は2009年4月21日にワシントン DC、ポトマック河畔のケネディ・センター（The John F. Kennedy Center for the Performing Arts）で行われました。場所はアメリカを代表する大きな文化施設ですが、授賞式の服装は Business Formal で、事前に登録すれば友人を連れてきてもよいという、アメリカらしいフランクな授賞式でした。

私はふとしたことから、製薬業界のお世話や、国連環境計画の MTOC で活躍する場を得ました。余り考えることなくこの仕事を始めましたが、慣れると共に、多様な人々と作業をすることが如何に大切であり、広い世界があることを教えられました。特

に MTOC では地域（地理的、経済的）、職種（化学、薬学、製剤学、薬理学、医師、行政等）、官民のメンバー30名が集まり、それぞれの視点から無理のないオゾン層破壊物質廃止の実現方法を議論します。英語は得意ではありませんので、激しい議論では置き去りにされます。しかし、異なる考察や意見に耳を傾けてくれる人が多いことも事実です。いつもの仕事を離れ、違う場所から自分の居る世界を眺めることも大事であると実感しました。また近年、個人や企業に社会貢献が強く求められています。専門的な知識と技術で貢献できれば、更に素晴らしいことではないでしょうか。

授賞式の週はスミソニアン博物館群や National Gallery を繰り返し見て歩きました。2003年に開館した Air and Space の別館でダレス空港に隣接する Udvar-Hazy Center にも足を伸ばしました。スペースシャトル、B29、コンコルドのような巨大機が収まる巨大な建物の中には、人類のあこがれと野望が詰まっています。ここでもアメリカという国の巨大さとプライドを感じます。

以下、参考までに――

《成層圏オゾン層の破壊》

1970年代前半に成層圏オゾン層の破壊が発見され、1974年カリフォルニア大学の Roland と Molina により塩素化合物によるオゾン層破壊機構が提唱された。1985年に Farman は南極と北極のオゾンホール急激な拡大を発表した。成層圏オゾン層の破壊は地表に到達する紫外線を増加させるため、自然環境に様々な影響があると考えられるほか、人体には皮膚がんや結膜炎の増加をもたらす。1987年 Anderson らによって ClO と O₃ の濃度の逆相関性が大規模観測によって実証された。同年成層圏オゾン層破壊物質の段階的廃止のためのモントリオール議定書が議決された。

モントリオール議定書により、chlorofluorocarbon (CFC：フロン、フレオン)、hydrochlorofluorocarbon (HCFC)、carbon tetrachloride (CTC)、methylbromide 等のハロゲン系ガスが段階的に廃止されることとな

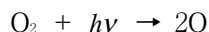
り、先進国では CFC は1995年末でほとんどの用途が廃止された。私達の生活の中でもエアコンや冷蔵庫の冷媒が代替フロンやノンフロンになり、スプレーの噴射剤が dimethyl ether や LPG などの石油系ガスになった。一方、喘息治療に使われる定量噴霧式吸入エアゾール剤 (Metered-dose Inhaler : MDI) では、非常に少ない量 (数10~100mL) を正確に噴霧するための技術上の困難さから、1996年以降も不可欠用途として、国連環境計画の管理下で CFC の使用が許されている。

CFC を含まない吸入剤には hydrofluorocarbon (HFC : 代替フロン) を噴射剤として使用する MDI, 及び噴射剤を使わず直接粉末を吸入する吸入粉末剤 (Dry Powder Inhaler : DPI) がある。いずれにしても、製剤の改良には数10億円以上の経費と10年前後の開発期間を要した。新規の製剤であれば100億円単位の開発費用が必要とされた。

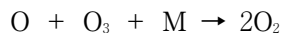
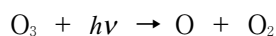
最後に化学の話を少しだけ――

《成層圏におけるオゾンの生成と分解》

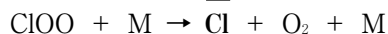
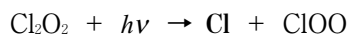
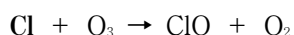
成層圏上部 (生成反応が優勢)



成層圏下部 (分解反応が優勢)



塩素原子が関与するオゾン層分解のプロセス



Cl は触媒的に働く！

Ozone Layer Protection Award の詳細は以下に；

<http://www.epa.gov/ozone/awards/>

研究者としての第一歩

平成15年卒業 (理学部物質理学科化学系) 垣内 拓大

2004年愛媛大学理学部物質科学科を卒業、2006年同大学院理工学研究科物質科学専攻 (現同大学院環境機能科学専攻) を修了、2008年3月総合研究大学院大学高エネルギー加速器科学研究科物質構造科学専攻を修了 (博士 (理学) 取得) し、その後、2008年4月に愛媛大学大学院環境機能科学専攻の助教に着任してから3年目を終えようとしています。大学職員として演習、学生実験、そして講義等にも慣れはじめ、年間3~5名程度の卒業研究生を指導している充実した日々を送っています。また、学生とともに行った研究で得られた成果は、学会発表や論文投稿で外部の評価を仰ぐことによって日々の研究の励みとしています。

私がこれまで研究を続けてきた理由として、化学の不思議を物理的視点から理解したい気持ちが強かったことが上げられます。まだまだ勉強しなければならないことはたくさん残っており、今後も自分だけにしかできない研究ができるように精進していきたいと思っています。と言っても、辛抱強く机に向かうことは簡単なことではありません。そこで、

学生との輪読会を開いたり、朝の比較的静かな時間に研究関連論文を読み込んだりする努力を行っています。そうすると週に1度くらいは知りたかった内容にふとたどり着くことができます。また、研究は楽しいものと言っても、成果を得るまでの過程でストレスは付き物なので、それを溜め込まないように努めて運動するようにしています。そのおかげで病気になったりせず、必要な時には多少無理の利く体になっていると思います。自分では、決して優秀ではないが結構丈夫な研究者だと思っています。まだまだ研究者として出発したばかりですが、いつか愛媛大学が輩出した人材として活躍できるよう、これからも自分の納得するまで努力していきたいと思っています。

最後に、研究者としての道を開いてくださった長岡伸一教授 (愛媛大)、研究の厳しさを教えてくださった間瀬一彦准教授 (KEK) をはじめとする多くの諸先生方、まだまだ少ないですが研究を共にしてくれた学生、日々を支えてくれた友人、そして家族に深く感謝いたします。

総会の報告

猛暑が続く平成22年9月4日(土)に本同窓会総会等の催しが行われました。まず14時から、愛媛大学正門右手にある南加記念ホールで講演会・総会が開催されました。この南加記念ホールとは旧記念講堂で、昨年約250席の劇場タイプのホールに改装され見違えるようになりました。改装に際して昭和20年代に記念講堂の建設費を寄付されたカルフォルニア日系人の志を記念すべく南加記念ホールと改名されました。

はじめに14時より約1時間、柳澤康信学長に「愛媛大学の近況あれこれ」と題して記念講演をしていただきました。平成16年の国立大学の法人化以後にソフトとハードの両面での劇的な変貌を遂げた愛媛大学の現状を紹介されました。なお、柳澤学長は元理学部教授で生物学教室に所属されていましたが、平成21年に小松学長（元理学部教授：地球科学教室所属）に続き理学部出身の学長として就任されています。

引き続いて15時10分より理学同窓会の総会が開催されました。城尾昌範会長の議長のもとで議事が進められました。まず平成20年・21年の活動報告、会計報告が行われました。その後、一色準副会長から次期会長、監査役の役員会の推薦案が伝えられ、会長に城尾昌範氏、監査役に谷弘幸、桑原英了の現監査役の継続が承認されました。続いて会長が推薦することになっている副会長・幹事も現在の役員が次期も続いて就任するよう委嘱されました。向こう2年間は下記のメンバーが中心になり、同窓会を運営することになりました。

〈顧問〉

佐藤 誠一《理学部長》
大六 隆《理学部事務課長》

〈会長〉

城尾 昌範《文理：生物 12回》

〈副会長〉

一色 準《文理：数学 13回》
東 長雄《文理：化学 18回》

〈幹事〉

遠山 鴻《文理：生物 16回》
仲田 秀雄《文理：物理 20回》
千葉 昇《理学：地球 1回》
佐伯 雅弘《理学：数学 13回》
二宮 啓二《理学：化学 14回》
高田 裕美《理学：生物 16回》

〈監査〉

谷 弘幸《理学：化学 12回》
桑原 英了《理学：地球 5回》

その後、会場を北隣の新しく建設された校友会館に移し、イタリアンレストラン、セ・トリアンで懇親会が16時より18時まで開催されました。参加者は約80名でした。恩師12名が臨席して下さいました。会は城尾会長挨拶、佐藤理学部長のご祝辞の後、柳澤学長の乾杯で始まりました。教室（学科）ごとにテーブルに着き、旧交を温め、また飛び入りの余興なども出て和やかな時間を過ごしました。懇親会終了後も教室ごと、あるいは同期生等で場所を移して盛り上がったとも聞いています。今回も年配の同窓生の参加が多かったですが、2年後（平成24年）の秋の次回総会には若い平成年代卒業の同窓生も多数参加して下さいますようお願いしています。



会 計 報 告

平成20年度 (2008. 4 ~ 2009. 3)

収	入	支	出
平成19年度より繰り越し	¥26,294,855	通 信 費	¥32,990
会 費（238人）	¥1,190,000	名 簿 管 理 費	¥285,600
利 子	¥41,886	東 京 支 部 補 助	¥711,550
		役 員 会 開 催 費	¥155,654
		会 報 発 行	¥945,370
		卒 業 生 記 念 品	¥138,423
		総 会 準 備	¥739,502
		そ の 他（備品）	¥242,300
		平成21年度へ繰り越し	¥24,275,352
収 入 計	¥27,526,741	支 出 計	¥27,526,741

平成21年度 (2009. 4 ~ 2010. 3)

収	入	支	出
平成20年度より繰り越し	¥24,275,352	通 信 費	¥34,094
会 費 (236人)	¥1,180,000	名 簿 管 理 費	¥296,100
利 子	¥70,474	東 京 支 部 補 助	¥500,420
		役 員 会 開 催 費	¥76,033
		卒 業 生 記 念 品	¥157,975
		平成22年度へ繰り越し	¥24,461,204
収 入 計	¥25,525,826	支 出 計	¥25,525,826



1 ページおよび本ページの写真は新しく整備された理学部キャンパスです。

事務局だより

本部事務局より平成20年秋からの主な活動を報告し、原稿募集のお願いをいたします。

1. 役員会の開催

平成21年度の役員会を8月24日に開催しました。前年度まで顧問をお願いしていた野倉理学部長、長谷川事務課長が代わられたので、新しく顧問をお願いした佐藤成一理学部長、大六隆事務課長をお招きして、理学同窓会の現状を説明しました。次に1年間の活動報告・計画を説明して論議しました。昨年の総会で承認された理学部のキャンパス整備の協力について、本館入口の生垣の植栽に協力することとなりました。同窓会の寄贈を示すために金属製のプレートをつけることにしました。

平成22年度の役員会を5月22日に開催しました。今年度は総会の開催年であるため主な議題は開催準備についてでした。総会を9月4日(土)に開催し、その時講演会を柳澤学長にお願いすることになりました。

平成22年8月23日に松山在住の役員が集まり総会の準備、役割分担等を協議して開催に備えました。なお、総会当日の詳細は総会の報告を参照してください。

2. 会報の発行

平成20年9月に城尾会長の下に理学同窓会の活動を活性化することになり会報も2年ごとに発行することになりました。平成19年発行の第5号に続いて平成21年2月に会報第6号を発行しました。同窓生の皆さんに届いたのは3月の初めになったかと思いますが、新同窓会員となった卒業生には何とか間に合い卒業式に渡すことができました。また、本同窓会の会員は約7,000名ですが、連絡先が判明している3,920名に送付して、あて先不明で59通返送されてきました。住所を変更された方はメールで結構ですから同窓会にもお知らせくださるようお願いいた

します。また、平成22年9月の総会后、会報第7号(本会報)発行の準備も進めてまいりました。

3. その他

平成22年度の卒業式当日に新会員(卒業生)約300名に記念品(同窓会名入りのボールペン)を贈り、住所連絡用の書類を渡して新しい住所が決まったら同窓会にも連絡するようお願いしました。卒業記念パーティーでも城尾会長が挨拶において重ねてお願いしました。平成23年度も同様にする予定です。

この他に、ホームページの更新、会員名簿の管理も随時行っています。これらは、幹事の高田裕美さんのご尽力によります。

4. ホームページの原稿募集のお願い

理学同窓会のホームページ(<http://www.sci.ehime-u.ac.jp/bio/rigaku/index.html>)では下記の2項目について同窓生の皆様からの原稿を募集します。投稿は郵便かメールでお願いいたします。なお、これらの原稿は同窓会会報にも掲載させていただく場合があります。また、より多くの会員の近況を事務局で把握するために、同窓生による小規模な同窓会の開催やユニークな活動をしている会員の情報、さらに本同窓会員が職業や社会活動などにより受賞をしたというようなニュースなどもご存知の方は事務局へお知らせください。

《会合だより》

同窓生の皆様の会合開催等の原稿を募集しています。それぞれの学科で同期会等を多々開催されているとお聞きます。今後はその様な会を開かれたら本部事務局にもご一報下されれば幸いです。ホームページで報告したいと考えています。写真も歓迎します。

また、会の開催案内もホームページの“ニュース”・“会合だより”により広報できると思いますので、是非ご活用ください。

《会員近況》

近況報告欄の原稿を募集します。同窓生の皆様の近況をお知らせください。写真つきも歓迎します。ふるって投稿ください。お待ちしております。

愛媛大学理学同窓会 会報 第7号

(文理学部同窓会報より通算19号)

平成23年2月 発行

愛媛大学理学同窓会

〒790-8577 松山市文京町2-5 愛媛大学理学部内

電話：089-927-8424

メールアドレス：rigakudousoukai@sci.ehime-u.ac.jp

ホームページアドレス：<http://www.sci.ehime-u.ac.jp/bio/rigaku/index.html>